

奈良県立万葉文化館蔵 『萬葉集卷第一』から見る 加納諸平の万葉集研究

阪口 由佳

一 はじめに

当館が所蔵する万葉集写本の中に、題簽も写本自体の奥書もなく、詳細不明の一冊がある^①。

はじめの3丁分に「萬葉第一奥書／文永十年八月八日於鎌倉書写畢…文永三年八月十八日 権律師仙覚」の元奥書をもつ、寛永版本と同形態の本である。写本全体を通して字配り（改行・改丁・文字の高さ）等も寛永版本に一致するが、版本そのものではなく、書写したものである。

1丁才から6丁才まで万葉集卷一の目録があり、所々に朱の片仮名傍訓と「大須本ナシ」（後述）の注記がある。

7丁才から卷一の歌本文がはじまり、その右ページにあたる6丁ウは寛永版本では空白だが、ここから朱で大量に書き入れがはじまる（論文末 画像1）。全体に頭注・傍注・傍訓・貼紙などで朱が入っ

ている。最後の29丁ウは七十九歌の途中までで終わっており、寛永版本卷一と比較して二丁分欠落していることになる（画像5・6）。卷二以降もあつたのか、卷一のみだったのかも不明である。

当写本は平成一一年に古書店より購入したもので、その際の記録に、

万葉集卷第一。江戸後期写。諸平云朱筆注釈入 一冊

表紙に題簽、書名はない。万葉集卷第一の大部分が書写されており、後半部が少し欠けているが、朱筆による書き入れはたいへん多い。「諸平云」からはじまる注釈が書き入れられていることが注目される。諸平は、江戸後期の歌人、国学者加納諸平^②と思われる。本居宣長の子本居大平の門弟で、遠江国学の流を汲み、柿園派と称せられる。この写本は自著か、門弟による講義録かと思われ、国学者諸平の『万葉集』に対する考え方が反映された数少ない資料として重要である。「諸平云」「諸平按」の他、「鈴屋云」「師云」等の校合のあとが見られる。との説明が残されていた。

また、近年当館蔵万葉集を調査された乾善彦氏^③の報告に、

・口32 万葉集卷第一

版本の本文のみを写し、朱で注を加えたもの

卷一、二十九丁ウまで（末二丁欠）

書き入れとして、鈴、本居氏、師説、縣居、考、岡、谷川氏、

正明、道麿、建正、荷田御風、山路介寿、久葛(藤本)、千蔭、
諸平按(貼紙)、玉勝間、逍遙院口伝などの名がみえる。

との紹介もあり、いずれも「諸平云」「諸平按」に触れられている。
この写本の書写者が加納諸平である可能性について、朱・墨の順に
検討したい。

まず朱について、「諸平按」の貼紙が複数あり、諸平以外の貼紙
はない。また、書き入れ内に諸平以後の人物・書物の引用もない。

朱は加納諸平の可能性が高いと推定した上で、東洋大学附属図書館
所蔵加納諸平の草稿二種①②と当館所蔵本の朱の書き入れ(★)と
を比較した。カタカナは誰が書いても差が出づらく断定しがたいが、
諸平は強弱のある書き方で、「レ」や「ル」の縦が短く、「へ」を扁
平(上括弧に似た形)に書き、「シ」「エ」の最後を長く伸ばして書く。



なお調査が必要だが、現時点では諸平筆と見ておきたい。

続いて、墨と朱は同筆と見てよいか。歌本文(墨)の一部を朱で
写している箇所を比較してみる。



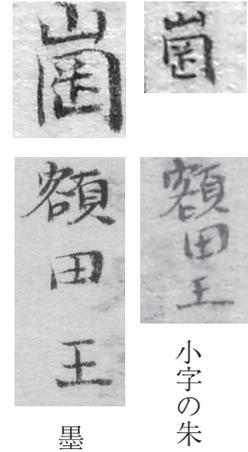
小字の朱



墨

すると、朱の文字の方がやや鋭い印象を受け、ハネ部分も長めで、
籠の最後の画の書き様なども異なっており、同筆と即断できない。

ただし、墨では文字間隔や字体などを寛永版本に合わせている点
を考慮する必要がある。墨で書かれた「籠」の最後が「マ」のよ
うな形で、「美」の重心がやや右よりであり、「母」の字が縦長であ
るのも、寛永版本に寄せたと考えられるのである。朱は限られたス
ペースに細かく書き入れるという状況や使用した筆の違いも考慮す
ると、別人の筆とも断定できない。



これらを比較すると同筆とみて違和感はない。諸平の手元に別人による版本の写本があったと考えるよりは、令書本か、自身が写したものと考える方が穏当であろう。

論文末の画像1・3からもうかがえるように、これほど細かく大量の書き入れを施すにあたっては、万葉集に対する大いなる関心があつたと考えられる。諸平の書き入れ内容を詳細に検討し、当写本の性格を明らかにしたい。

二 加納諸平と万葉集

加納諸平は、『国史大辞典』によると、

加納諸平 一八〇六一―五七 江戸時代末期和歌山藩の歌人、

国学者。通称小太郎・春太・白太・杏仙・兵部。名ははじめ諸平、

一時、長樹・兄瓶と称し、安政元年（一八五四）諸平にかえつ

た。号を柿園という。文化三年（一八〇六）に、遠江浜名郡白

須賀（静岡県湖西市）で、代々酒造業を営み本居宣長の高弟で

国学者・歌人でもあつた夏目甕磨と末との間に生まれた。文政六年（一八二二）和歌山藩医師加納伊竹の養子となり、医学のほかに、本居大平から国学を学ぶ。天保二年（一八三一）『紀伊続風土記』編纂員に任ぜられ三人扶持、四年和学出仕を命ぜられ国学者として藩に認められ、同六年『紀伊国名所図会』第三編新撰を命ぜらる。和歌山藩の国学所設立に尽力し、安政三年国学所総裁、翌年六年二十四日、書齋で没。五十二歳。和歌山湊道場町海善寺に葬る。『紀伊続風土記』『紀伊国名所図会』『類題鮫玉集』の編集、歌集『秋風集』『柿園詠草』、註釈書『万葉名所集』などがある。

という人物である。実父が本居宣長の高弟、自身が本居大平の門人であり、遠江と紀伊にゆかりが深いことに注意しておきたい。

加納諸平については、山本嘉将氏の研究に詳しい⁸⁾。氏が加納諸平の研究業績について解説している中に、次のような興味深い記述がある。当写本にかかわると考えられる、重要な解説である。

万葉集註解 着手してゐたと推定する著述 書名仮称成否未詳

天保七年（諸平三十一歳）の鷲見安喜宛書簡に、諸平自身が

この点にふれてをり、其の他にも考え得るふしが多い。諸平の発言は次の如くである。かなり構想の大きいものである。

万葉集中、御考共無御座候や承度候。小生儀、兼而万葉註解に志御座候処、此ほど中、をり〜講尺の時、少々づつ

自他の考を書たてかけ候をはじめに致候。

追々註し候心得に御座候間、何にもあれ彼書に預り候御考等、御きかせ被下度候。尤、作者の系図、草木の類、図にてわかり候ものは図をも加へ申度、大に委敷致候つもりにて、実は古言のみならず、大抵上世の事跡を解たてて、書紀の末方より統紀中の事実の補助ともなさんとの心得に候へば、地名等の解も可相成は、地図をさへそへばやと奉存候。

(天保七年鷺見安喜宛 架蔵)

このように、諸平の書簡が引用されている。山本氏は諸平研究の第一人者であり、関係資料を多数所蔵していたが、当写本は見えていなかったようである。ただ、諸平が万葉集の注解に志があったという点、講釈しながら具体的に書き始めていることがこの書簡からわかる。傍線を付したように、日本書紀・続日本紀の事実の補助にしたいとの思いがあったことが知られる。また、この諸平の情熱の源泉は真淵への思慕であったと、山本氏が続いて述べている。

真淵の思慕について、その郷里遠江では、すでに夏目甕麿によつて真淵の自筆草稿『万葉集遠江歌考』の刊行の挙があったが、当時甕麿が念願した県居霊社の建立については、引続き高林方朗や石川依平らによつて引き継がれ、その功を奏して同志の岡部出雲が呼び出しを受けて藩から霊社建立の認可を受けたのが、天保六年の七月のことであった。

このとき諸平は、紀州藩内特にその柿園社中を勧進して得た金八両を寄進してゐるが、その前年に、石川依平の勧誘に答へて彼に送った書簡の中に「実に此翁なかりせばと、神とも神とあふぎ尊居申候」とも「いかで遠江の古学本源を忘れざるやうにと祈居候」とも言つてゐるのである。遠江の古学本源を仰ぐことは、その中にその国に生れた自己の使命を感じての発言であつて、かかるが故に県居霊社建立の認可のあつた天保六年七月には、諸平は先人追慕のあまりに実に大きな希望に燃えたのである。すなはち同年七年廿九日の条に『村田春門日記』の録するところによると、方朗が春門に対して「加納諸平、万葉集詳解と申もの凡百巻、別記二十巻ばかりにも可成哉、著述発願云々」と通信したといふのである。研究に対する彼の希望は具体的である。しかし、其の後どの程度にこの著を進めたかは分らない。たゞ終生関心を持つてゐたであろうと思ふことは、彼が急逝する直前に書齋で手にしたのが万葉卷一の写本であつたと小谷古蔭は報告してゐるのである。詳解のことに着手もし、ある程度は進んでゐたのであらうが、何れにしてもその成否は未詳である。なほ安喜宛書簡に見える諸平の万葉集の講義に関しては、その開始の時期、すはなち天保七年の頃本居内遠に従学してその家に寄宿してゐた桐林広滋が、講席でノートしたものが手許にある。¹⁰⁾

遠江出身の諸平は、賀茂真淵への熱い思いがあり、それが万葉集研究に向かわせたと考えられる。天保七（一八三七）年ごろから一八五七年亡くなる間際まで万葉集に特別な思いを抱いていた。

当館所蔵巻一の書き入れがいつの時点のものかは判断しかねるが、諸平の真淵に対する思いと、日本書紀・続日本紀の事実を補助したという学問的関心は確かに書き入れにも見て取ることができ（後述）。以下、本論文内において、当館所蔵諸平書き入れ本の万葉集巻一を「諸平本」と仮称する。

三 本居宣長手沢本との関係

諸平本の書き入れ内容を調べていたところ、本居宣長記念館所蔵の宣長手沢本^①が諸平本と驚くほど一致していることに気づいた。きっかけは城崎陽子氏の論に挙げられていた翻刻である。

たとえば諸平本6丁ウ（目録の裏、巻頭歌の前）の書き入れのうち、手沢本との一致部分を傍線（異同箇所傍点）で示すと、

① 榮花物語月宴卷云ムカシ高野ノ女帝ノミヨ天平勝宝五年二ハ左大臣橘諸兄卿大夫等集リテ万葉集ヲエラハセタマヒ

② 二条良基公ノサヨノ祢覚ニ云顯昭トイヒシ人日本紀ノ神代ヨリノ歌ノ心ヲカキアラハシ仙覚ト云ヒシモノ万葉ノムネヲエラヒ三百余首順タニモヨミトカサル点ラクハ侍リ

③ 万葉集橘諸兄撰聖武帝勅家持同撰云々此説非也家持自分ノ撰ナリ

④ 御宇古ノ文ニハスヘテ某ノ宮ニ天下宇ス天皇ノ御世ト申セル事ナルヲ後世ノ俗文ニハナベテ某天皇ノ御宇ト申ハ非也御宇ハ天下所知看ト云事ニテ御宇時御宇ノ世ナト、コソ云ケレタ、ニ御宇トノミニテハ其時ト云事ニハナリカタキゾカシ

⑤ 統紀九ノ九丁 養老六年ノ文ニ藤原宮御宇大上天皇トアリ

⑥ 籠母与 夫木卅三コケコロモ、チフクシモヨミ、フクシモテ、コノヲカニ、ナツムスコ、イヘキケ、トアリ 昔ハ籠毛與美籠母云々ト訓シニヤ

⑦ 縣居説 須見ハシツコ也

⑧ 尾張名見屋大須真福寺所蔵万葉集巻一ノ残簡一冊アリ其本ハ端書ヲ上テ書テ歌ヲ下ケテ書リ訓ハ印本ト同シサマ也

と、八項目中七項目までが手沢本と一致している。但し手沢本では①が6丁ウの書き入れ1、②が6丁ウの貼紙2、③が6丁ウの書き入れ2、⑤が7丁オの貼紙2、⑥が7丁オの貼紙1、⑦が6丁ウの貼紙3、⑧が6丁ウの貼紙1となっており、順序や形式は大きく異なっている（論文末画像1・2をご参照いただきたい）。

①の「諸兄卿大夫等集リテ」は手沢本「卿諸兄諸卿大夫等アツマリテ」、②の「祢覚ニ云」は手沢本「ネサメニ云ク」、⑦の「縣居説」は手沢本「師説【加茂縣主】」、⑧の「同シサマ」が手沢本「同シ書

「サマ」になっているなど、細かな違いはあるものの、内容はほぼ同じである。

城崎氏の論に記されていた六首分(一・二・三・四・八・九番歌)の手沢本の翻刻と諸平本を比較したところ、6丁ウと同様、やはり手沢本に一致する書き入れが多くみられた。そこで本居宣長記(念館に卷一全体の調査にうかがった。先の⑧に大須真福寺所蔵万葉集を挙げている)とおり、手沢本・諸平本ともに目録以降、大須本との本文の異同が記されている。手沢本で宣長の考えであることを示す「宣」は諸平本では「鈴」に置き換えられ、手沢本では「師」としている真淵説を「縣居」「岡部翁」「岡」と置き換えているが、内容は一致している。すなわち、手沢本と無関係に諸平本はありえない。ただし、手沢本にない注も数多く加えられていた。

宣長手沢本は全二十巻が揃っている。卷二十末尾の奥書⁽¹⁴⁾によると、一七五七年、宣長が堀景山經由で今井似閑説の万葉集を得て、宣長自身の万葉集(寛永版本)に写し入れたものであることがわかる。さらにその後宣長は万葉集の講義をはじめ、一七六一年から一七七三年まで一回目、一七七五年から一七八六年に二回目、その後も宣長が亡くなるまで万葉集講義の機会があった。その間に手沢本への書き入れが蓄積していったとみられる。一七五七年に書写した今井似閑説万葉集にすでに契沖・代匠記の説による書き入れがあったことから、宣長手沢本の書き入れは非常に複雑なものであるといえ

る。

さらにそれを受け継ぎ、諸平自身の写本に書き込んだのが当館所蔵諸平本である。諸平本の朱の書き入れの内容には、大きく二層あることになる。

- ・宣長手沢本(あるいはその写本)を写したもの⁽¹⁵⁾
- ・諸平が新たに注したもの

諸平本の書き入れには、以下のような多数の人名・書名が見えるが、すでに手沢本にあるものも多い。新たに諸平が付した注と、もとの注を区別するため、手沢本にあるものには網掛け、手沢本にないものに*を付した。ただしこれは手沢本巻一と諸平本の書き入れとを比較した限りのことであり、*を付したものが手沢本に存在しないことを保証するものではない。

- ① 鈴 || 本居宣長(手沢本では「宣」)
- * ② 本居氏
- * ③ 師 手沢本にない「師」説多く有り。
- ④ 縣居 || 賀茂真淵(手沢本では「師」)
- * ⑤ 考 || 万葉考
- ⑥ 岡 || 岡部 賀茂真淵(手沢本では「師」)
- ⑦ 谷川氏 || 谷川士清
- ⑧ 正明 || 石原正明(手沢本では「石原正聴」)
- ⑨ 道麿 || 田中道麿

* ⑩建正たけまさ 〓 本居建正

⑪ 荷田御風 (手沢本では「或」のりかぜ「羽倉御風」)

⑫ 山路介寿すけとし 〓 山地介寿

* ⑬久葛ひさつら 〓 藤本久葛

⑭ 千蔭ちかげ 〓 橘(加藤) 千蔭

* ⑮諸平 〓 加納諸平

* ⑯玉勝間

⑰ 逍遙院口伝

⑱ 尾張人本麻呂 〓 山脇元貞

⑲ 千楯 〓 城戸千楯

⑳ 東麻呂 〓 荷田春満 (手沢本では「或」)

㉑ 磯足 〓 加藤磯足 田中道磨の門人

㉒ 中 (手沢本では冲) 〓 契冲

* ㉓遠鏡 〓 古今集遠鏡

* ㉔記伝 〓 古事記伝

* ㉕玉小琴 〓 玉の小琴

* ㉖解 〓 略解

諸平は手沢本を書写するにとどまらず、自身で多くを補った。文字数(分量)としては手沢本に基づく注が多いが、引用元の種類としては数多く諸平自身追加していることがわかる。後述するが、これ以外にもさまざまな古典資料を引いている。

諸平が加えたものについて、②「本居氏」③「師」は手沢本に一致箇所がなく、誰を指すか判断としない。⑤万葉考とともに次節で検討する。

⑩本居建正たけまさは本居大平の子で、文政二年(一八一九)年三二歳で没。宣長より後の時代の人であり、手沢本には該当箇所がない。諸平より年上である。

⑬藤本久葛ひさつらは宣長・春庭の門人。文政一二年(一八二九)六五歳で没。宣長の手沢本書き入れ時期と活動時期が重なっている可能性もあるが、手沢本巻一には該当箇所がない。

⑬⑭⑮⑯のように、手沢本だけではなく、その他の宣長の著作によって注を補っている。また、手沢本にある千蔭説だけではなく、⑲のように略解からも引用している。

また、手沢本にありながら、諸平が写さなかったものもある。諸平本においては訓を断片的にししか付しておらず、歌の訓への興味がうすい。宣長の訓や誤字・脱字説も採用していないものが散見される(論文末画像5・6)。

一方、諸平本は手沢本と比べて日本書紀の引用が格段に多く、逐一引用している。歌自体よりも題詞・左注への興味が強く、手沢本にない注として新撰姓氏録・大和志・帝王編年記・通語・唐書・常陸風土記・今昔物語集・神名帳・釈日本紀・懷風藻などの引用を加えている。万葉集の歌の解釈より、歌が詠まれた背景となる地理・

歴史の方に書き入れの主眼があると考えられる。

四 万葉考の利用・引用

前節で諸平本が「本居氏」「師」とする書き入れが手沢本にはないことを指摘した。「本居氏」は一例のみ、二八歌の藤原宮の注として「本居氏曰其地在香具山西耳梨山南」とある。説明が一般的なものであり、何に基づいたか判別しがたい。また、「師」説は五例ある。

〔三歌〕 師云中皇命ハナカノミコノミコト、ヨマンカ 御兄命ヲオホエト申セハ也 考ニ女ノ字ヲ補タルモ古事記ニハ男皇ヲモ女皇ヲモミコト、ヨミタリ (7ウ)

〔二三歌〕 師云イラコガシマ イラコ能シマトアレハのトがトハ差別ナキカ モシ差別ナクハコノ二首ヲ証トスベシ 又思フニ荷ハノトヨムヘキカ ノサキノ例也 (15オ)

〔二四歌〕 師云ココノ歌ヲ証トシテ紀文ヲ却テ誤トセンモノニコトカアラン (15ウ)

〔三〇歌〕 師云今モ勢ノ山村ト云アリ サテ歌ニハセ能山トカクトモ詞書元勢ノ山 能ハ書マジキ事ナルライカガ (18オ)

〔五七歌〕 榛原ト云文字ハ神武紀ノ十九丁ニアリ コレヲ今ノ萩原ノ駅ノ事ナラント紀傳十八ノ卅丁ニアリ 師云榛原ト萩原ト同処ナラハ榛ヲはきトヨメル説モステカタシ (25オ)

三歌の注で師説が考(真淵)の説と一致しないこと、五七歌の師説が古事記伝の説を援用していることから、師説は真淵ではなく長の流れにある説であるといえる。「師」は大平の可能性が高いと推察するが、本論の段階では調査が行き届かず未確定である。

前節で見たとおり手沢本ではすでに真淵説が引用されているが、さらに諸平は「万葉考」に基づいて二十例以上引用を追加している。その上、引用元を示さない書き入れにも万葉考に基づくものが散見される。

たとえば、二〇歌の注として諸平が「葉狩ハ推古ニ始ル鹿ノ若角ヲトラントテノ獵也 草ヲトルト云ハ誤也 キソヒカリトモ云第十七」と手沢本を引用した後、「又五月五日ニ百草ヲトル事モアリ」と、手沢本に矛盾するような説を追記している。これは万葉考の「さてから国の医のふみどもに、四・五月鹿の茸を取ること多く見え、又五月五日に百草を採ることも見ゆ」に基づくのではないだろうか。また二二歌の波多横山巖について、諸平本には手沢本にない「神名帳伊勢国壹郡波多神社 和名抄同郡八太里今モ八太里横山ト云アリテ大ナル岩ドモ川ヘニ多シト申」という注がある。万葉考に「神名式に、伊勢国壹郡波多神社、和名抄に、同郡に八太郷あり…今も八太里あり、其一里ばかり彼方に、かითうといふ村に横山あり、そこに大なる巖ども川邊にも多し、是ならんとおぼゆ」とあり、語句が共通する。

二五歌の耳我嶺について、諸平本は「今昔ニ此嶺ニ金多キ事アリ」
 「源夕兒枕草子御たけさうし」「形甕ニ似タルユヘカ 考ニ金ノミ
 タケナラント云説アリ」としているが、万葉考の別記に「此山の形
 大きな甕に似たればにやあらん」「源氏夕兒物語に、御たけさう
 じにぬかづく声を聞て…今昔物語に、此嶺にこがね多き事いひしを
 …」とある。

そのほか万葉考を参照したと思われる例に、

【諸平本】「天皇マダ清御原宮ニオハシマス時ノ御歌ナル事下ノ歌ニテ
 シラルサレド天武天皇崩マシテヨリハ藤原宮ノ中ニ入ル例也」

【考】「こは持統天皇まだ清御原宮におはします時なる事、下の歌にて
 しらる、されど天武天皇崩ましてよりは藤原宮の中に入る例也」

【諸平本】「集中冷不楽ナトカケリ」

【考】「佐夫思は集中に、冷・不楽・不怜など書つ」

【諸平本】「志摩国英虞郡ココニ行宮アレハ京ヨリオシハカリテヨメル
 也」「海士ヲトメナラヌ宮中 裾ニ潮ミツトイヘル事メツラシ」

【考】「こは志摩国英虞郡の浦也 行宮こ、に在ことを聞ておしはかり
 によめる也」「海をとめこそあらめ、宮女たちの赤ものすそに汐み
 ち来なんは、めづらしく面白き事を思ひたり」

【諸平本】「或本注云大宝元正月遣唐使民部卿粟田真人朝臣以下六十人
 乗船立双小商監徒七位中宮少進美奴連岡麻呂云々トアリ」

【考】「古本の傍注に…」以下同じ

【諸平本】「道行云々トイヘルハ陸ノ道ヲモユケハカクイヘルナリ」
 【考】「人は道にのぼりても行」
 などがある。

諸平は宣長手沢本を書写し、宣長の著作からも注を補い記した。
 宣長説を重視する一方で、さらに万葉考から真淵の考えを積極的に
 引用しようとしたことが、これらの多数の例からわかるのである。

五 諸平が重視したもの

以上のように、手沢本および万葉考との比較によって、諸平が真
 淵・宣長の学問を継承し、手沢本に則りながらもさらにそれを補充
 しようとしていたことを明らかにした。それが訓よりも、題詞左注
 など歌の背景の方に関心を寄せつつ引用していることはすでに述べ
 た。

諸平は先人から学ぶだけで終わったのではなく、独自の解釈も盛
 り込んでいる。特に諸平本の中で、「諸平按」とした長文の注記が
 三か所あることが注目される。諸平の考えが直接記された部分であ
 るため、内容を確認しておきたい。一か所目は三四歌についての注
 記で、貼紙に書かれている。

(一) 諸平按ニ白浪ヘヨスル濱松ハイツコノ浦ニテモアリヌヘ
 ケレト此歌ノ意ヲ深く考フルニ牟婁温泉行幸ノ道路ニテ行宮ノ

アリシ磐代ナルヘシ◎「二ノ廿二丁」磐白ノ濱松ケ枝ヲト有馬ノ皇子ノヨマレタル濱松ケ枝ト同シク◎サテ此川島皇子ハ天智天皇ノ二子ニテ齊明四年ニ天智帝皇太子トマシケル時齊明帝ニ從ヒテ温泉ニ坐シケル時此磐代ノ行宮ニ宿玉ヒ其時此所ニテ松ケ枝ニ手向シタマヘル草ノソノママニアルヲ見玉ヒテ往事ヲ思ヒテヨミタマヘルニテ憾_{深シ} 齊明四年ヨリ持統四年マテハ終ニ三十三年ニテ齊明天智天武持統ノ四代ナルヲ幾代マテトヨマレタルハ其三十余年ノ間ニ有馬皇子ノ事ナトヨリハシメテ壬申ノ大乱ノ如キ事アリシヲ下ニオモヒテカク幾百年ヲモ経シヤウニ世ノ沿革ヲ歎キテヨミタマヘルナリ 此皇子ハ懷風藻ニ資性温裕度量弘雅トアリテ忍壁王ナトト帝紀ハタ上古ノ事ヲ撰シタマヘル皇子ニマシマセバナミナラヌ事知ヘシ

此歌ヨミタマヘルハ皇子ノ三十四ノ御年ナリ サテ終ノ間ヲ幾代マテト欲シタマヘルニ似タル事ハ統紀神龜元年十月僧尼ニシテ夕籍ヲ勘検スル事ヲイヘル條ニ白鳳以來朱雀以前年代玄遠難明トアル朱雀白鳳ハ終ナル間ヲ壬申ノ大乱ニテアラハニハ記シカタキ事アリテカクイヘル年代玄遠ニ照シテ思フニマスマス憾_{深シ}

或云山上憶良トアルハ二ノ卷ニオクラカ結松ノ歌アルニヨリ混シタル伝ナカラ此歌磐代ニテノ歌ナル証トハスベシ

これが諸平本の中でもっとも長文の注記である。川島皇子の歌の

「松」が、有間皇子の磐代の結び松であることを説明している。川島皇子の歌の年代と有間皇子の歌の年代を正確に把握し、三三年間のことを「幾代」と歌うのはその間に世の中が大きく変化し、年代以上に時代が変化したことが影響していると示唆する。懷風藻や続日本紀を引用し、人物や年代観を確かめている。

二か所目は三五歌についての注記で、貼紙に書かれている。

(2) 諸平按 阿閉皇女ハ日並皇子尊ノ御妃ニマシマシ夫君日並ハ持統三年ニ薨シ【御年廿八】給シカハ此行幸ノ時ハ皇女ハ天武十二年ニ御年廿三ニテ天皇ヲ生ミ奉レハ此時ハ三十坐セリ

此御歌ニ大和ニシテハワガ恋フル先年日並皇子ノ没シタマヒシ事ヲイツモオモヒ玉テハ立奉レルニ紀伊ニハ背ノ君ノ名負ヘル山アリトキキシユヘ紀伊ニ行カバ背ノ君ニモアハンカトテコシヲコレカカノ恋兄ノ山カ山ノ名ノミニテ背ノ君ノオモカケモナキ事ヨト歎シタマヘルニテ憾_{深シ}

と、阿閉皇女の年齢や前年夫の日並皇子が亡くなっていることを確認し、紀伊に行けば恋しい夫に会えるかと思つたが、背の山は「背(夫)」という名前ばかりで夫の面影もないと嘆く歌だと説明している。事実に照らして歌の背景や心情を説明しようとしている。

三か所目は三十六歌についてである。これは頭注である。

(3) 諸平按此歌四年紀行幸ト六年伊勢行幸トノ間ニアリテ此

歌二花チラフトアルニヨルニ紀二五年四月十六日行幸トアル時
ナル事幸記モ時節モカナヒ又次ノ長歌ニ鶴河ヲ立トアルニモカ
ナフナリ七日フリニテ廿二日ニカヘラセ玉ヘリ

これは歌の表現と日本書紀の記述から、吉野行幸の時期を確定しようとする注記である。

既に諸平が日本書紀や続日本紀の補助として万葉集を活用しようとしていたことを見た。長文の書き入れもその営みの一貫であると考えられる。

さらに貼紙で記された(1)(2)についてはいずれも紀伊での歌であること、諸平の「憾深シ」という感想まで繰り返し書かれていたことに注目すべきだろう。諸平は十代のころから紀伊に住み、万葉集研究を志す時期に『紀伊国名所図会』第三編新撰を命じられている。この二枚の貼紙がその営みを反映していると考えられ、なおかつ研究や任務を越えて、紀伊で詠まれた万葉歌に深い思い入れがあったこともうかがえるのである。

六 おわりに

以上のように、万葉文化館蔵『萬葉集卷第一』の著者を暫定的に加納諸平と認め、手沢本との比較を試みた。考察を通して、宣長の書き入れを多く受け継ぎながらも、諸平自身が少なからず補記して

いたことを明らかにした。補った内容もやはり賀茂真淵・本居宣長・橘千蔭など、国学の先達によるものであった。さらに独自の注も付し、地理・歴史考証への関心、紀伊への思いが反映されていた。

巻一は最初の巻でもあり、真つ先に着手したと考えられる。そして山本氏の解説にあつたように、急逝する直前まで愛着をもつた巻であると考えられる。おびただしい朱の書き入れに諸平の情熱を見ることができるといえる。

諸平のその他の著作との関連など、考察すべき点は多く残されているが、本稿においては諸平が万葉集をどのように受け止めたのか一端を明らかにしえたところで結びとしたい。

註

- ① 当館整理番号口の32、縦二七・四cm、横一九・三cm、袋綴一冊。
- ② 奥書を含めて全部で32丁分あるが、寛永版本では巻頭奥書部分の丁数は含めず目録から1丁になっているため、便宜上その数え方に合わせる。
- ③ 担当坂本信幸、上野誠、垣見修司。
- ④ 加納諸平以外に「諸平」の名をもつ国学者は伝わっておらず、論者も写本中の「諸平」は加納諸平のことと認める。
- ⑤ 乾善彦「万葉集をよんだ人々・人々のよんだ万葉集」付、万葉文化館蔵万葉集および万葉集関連書籍―（『万葉古代学研究年報』第十七号 二〇一九年三月）
- ⑥ ① <https://kotensoki.nijiac.jp/biblio/100026390> 「貫之主のかかれたる古今集」（マイクロ表紙「加納諸平批評」東洋大学稲葉文庫 写本二冊。但

し一冊は草稿、一冊は清書で、草稿の方が当館所蔵一卷に近い) および
② <https://kotensekiniji.ac.jp/biblio/100026513/> (マイクロ表紙「加納諸平」稲葉文庫三枚。頭注カタカナ)。

⑦ この例は「タマウ」だが、「タマフ」の書入れもあり、右の例と矛盾しない。
⑧ 『加納諸平の研究』(初音書房 一九六一) 第三章第四節。なお山本嘉将氏のもとにあった加納諸平関係資料は、東洋大学附属図書館稲葉文庫に寄贈された。またその多くは国文研によってマイクロフィルム撮影され、公開されている。

⑨ 「加納諸平書簡」 <https://kotensekiniji.ac.jp/biblio/100026502/> がこれに相当する。引用部分はマイクロフィルム5コマ目。

⑩ 大内瑞恵「近世国文学と鷲見文庫―東洋大学附属図書館蔵稲葉文庫目録と研究2」(『東洋大学大学院紀要』五十五号 二〇一九年三月) による、仮番号197、

柿園講席 万葉集 加納諸平篇 写(仮綴) 2冊

① 桐林広滋草稿か。② 「萬葉二ノ巻磐姫皇后の御哥」。

メモ 「加納諸平桐林広滋答問録」各自筆

がこれにあたると思われるが未見。「メモ」とは旧蔵の山本嘉将氏による注記である。マイクロフィルム公開はされていない。

⑪ 宣長書き入れ本は鈴屋本ともよばれるが(大久保正「解題」『本居宣長全集』6 筑摩書房 一九七〇年)、所蔵元である本居宣長記念館ホームページ『万葉集』の解説(「主要収蔵品」内「6 宣長の学問」)、

27歳の時に購入。おびただしい書き込みがある宣長手沢本。(国重文)

との記述に従い、本稿では「宣長 手沢本」と呼ぶ。

⑫ 城崎陽子「本居宣長記念館蔵「本居宣長手沢本『万葉集』」における注釈と環境」(『マテシス・ウニヴェルサリス = Mathesis universalis : bulletin of the Department of Interdisciplinary Studies』19—1 二〇

一七年九月 獨協大学国際教養学部言語文化学科)

⑬ 城崎氏前掲論文に「当寺には現在の『万葉集』のテキストは伝来していないが(中略)巻一のみ零本として一本が伝来していたことがわかる」等の説明がある。

⑭ 本居宣長記念館ホームページ「ようこそ宣長ワールドへ」内「宣長の使った古典のテキスト」の解説を引用する。

『万葉集』は、寛永版本と呼ばれる本を使用。

『万葉集』 版本・宣長書入本・20冊。袋綴冊子装。紺表紙。楮紙。縦27.8cm、横19.1cm。

墨付(1) 34(裏表紙含)(以下略)

外題(題簽)「万葉和歌集一(〜廿)」。

内題書名同。蔵書印「鈴屋之印」。

【刊記】

「寛永式拾年【癸未】 蟬月吉日、洛陽三条寺町誓願寺前安田十兵衛新刊」

【奥書】「右万葉集二十卷、以景山屈先生家藏本校正之、至如冠註旁註亦皆拠其本已、此本也先生所自校正、蓋以契冲先師代匠記為拠、如其称師云則今并似閑翁之説也翁亦契冲之門人也、先生与似閑之門人樋口老人宗武友善、是故先生以其本校正、訓点冠註旁註之則実契冲伝説之義、不待代匠記而明焉者也、予深崇信之以余力写之藏巾筒為秘珍矣、後之閱者勿忽諸爾、宝曆七年丁丑五月九日卒業于平安室坊寓居、神風伊勢意須比飯高舜庵本居宣長謹」。「天明六年丙午十月十二日夜会読卒業」

【参考】

『宝暦二年以後購求騰写書籍』宝暦6年10月条に「万葉集、廿冊、卅五匁」とある。付箋(宣長筆)278枚。書き入れ多し。特に荒木田久老や門人説をその名を明記し引くこと多し。本書の書き入れを写した本が各所に伝存する。鈴屋来訪時に書写したものか。例えば帆足長秋もその一人

である。

(15) 宣長手沢本に基づいた写本群があることが報告されており（前掲本居宣長記念館解説、および乾喜彦氏前掲論文）、当館所蔵『万葉集傍注』も宣長手沢本の奥書をもつ。奥書の続きに由来が記され、手沢本―本居（稻掛）大平―内山真龍―堀口光重の手を経たものようである。ただし、諸平本と『傍注』に共通する書き入れは、手沢本と共通する部分のみである。諸平に基づいた本が手沢本であっても以下の写本であっても、*を付した注については諸平が付したと考えてよいと思われる。当館蔵『万葉集傍注』については稿を改めて考察したい。

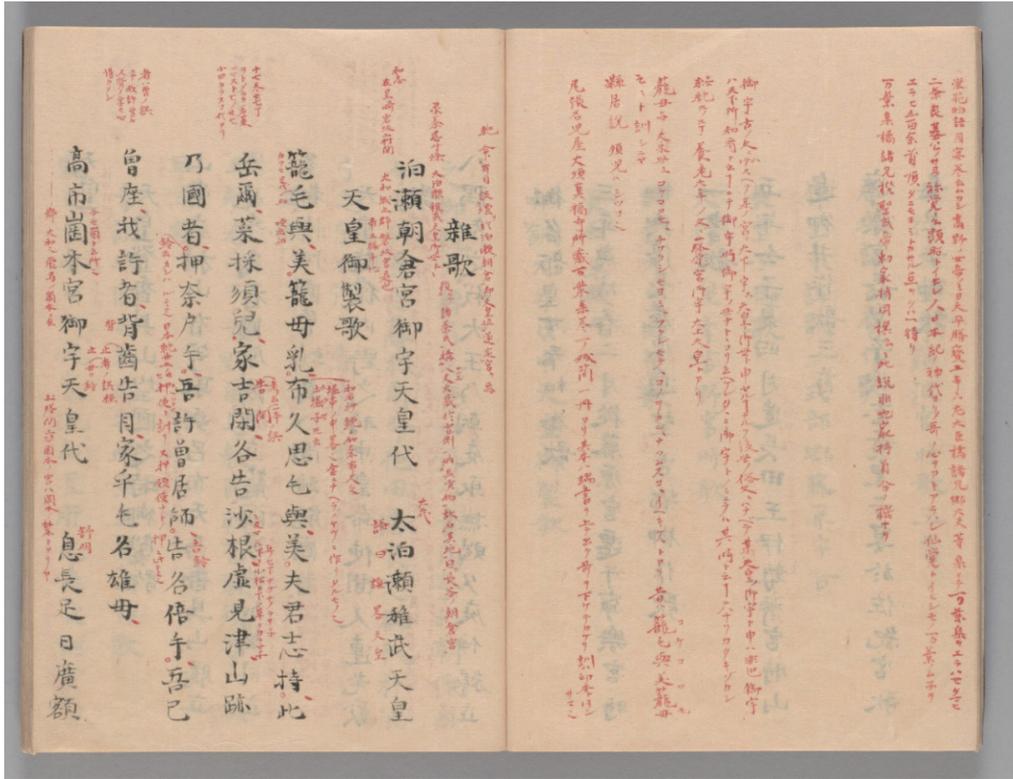
(16) 読み方および生没年は『和学者総覧』（國學院大學日本文化研究所編 汲古書院 一九九〇年）による。

(17) 万葉集の引用は『賀茂真淵全集』巻一・巻二（統群書類聚完成会 一九七七年）による。

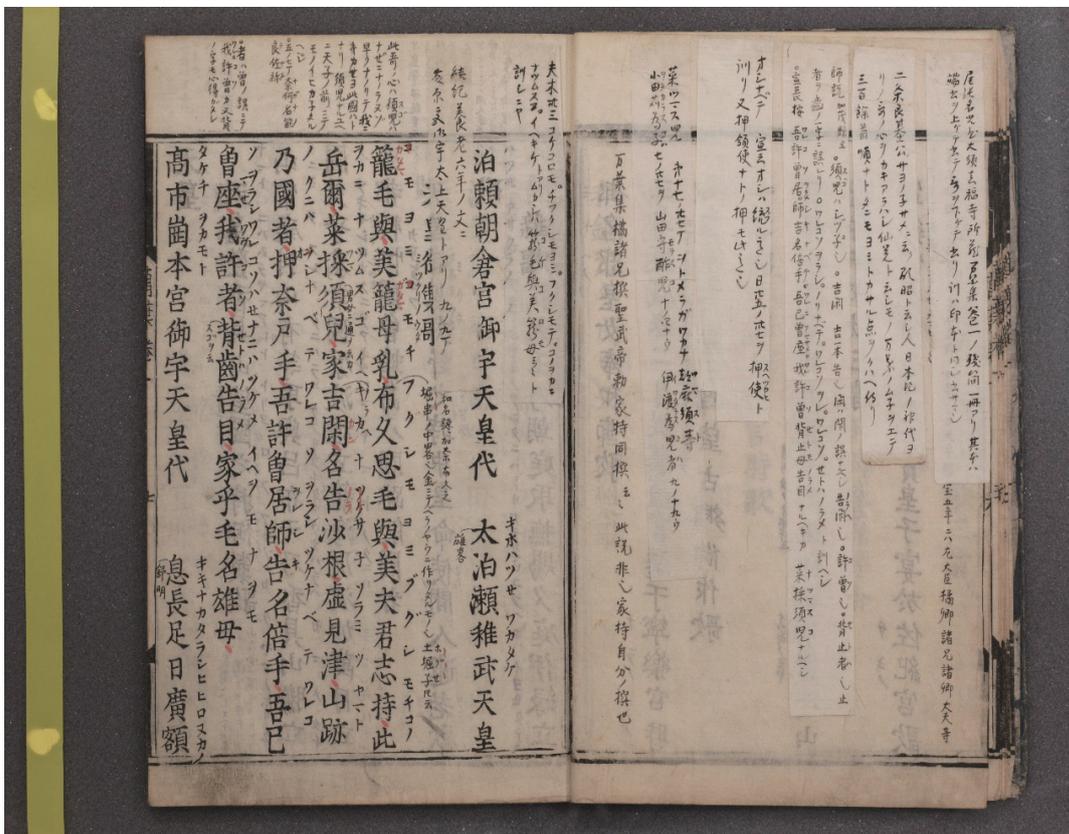
(18) 「憾」は「恨」の意だが、諸平本における「憾深」は感慨深い、思うところが多い、のような意と考える。

付記

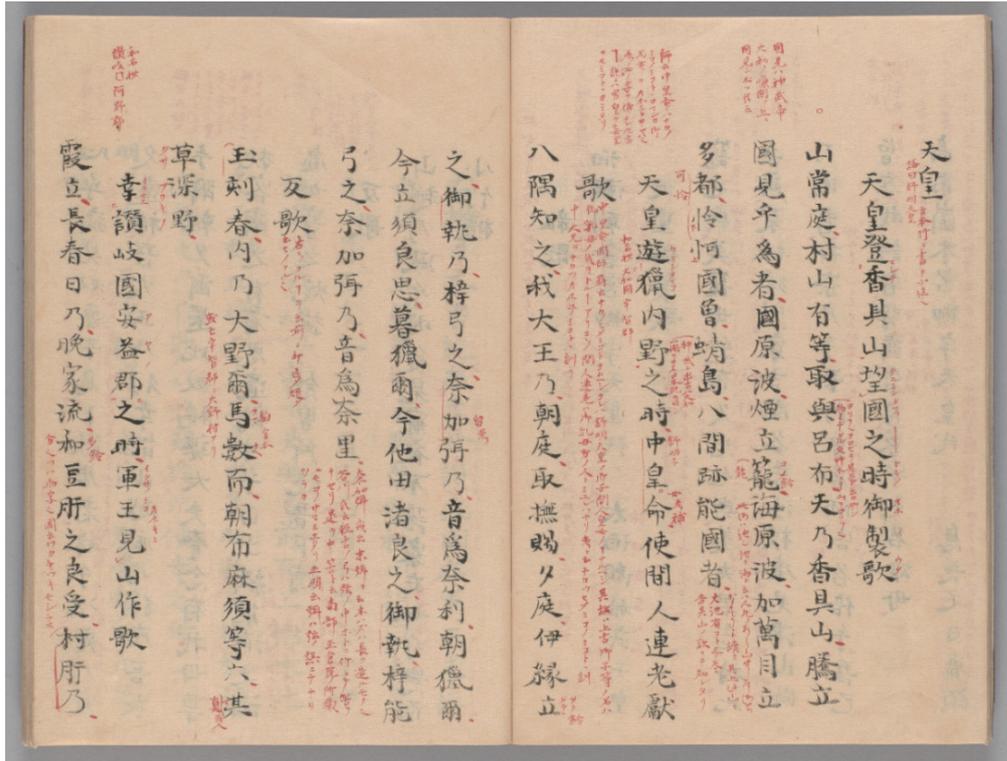
本稿を成すに当たり、本居宣長手沢本『万葉集』の閲覧および画像掲載（画像2・4・6）について、本居宣長記念館より格別のご高配を賜りました。また、加納諸平草稿の画像掲載について東洋大学附属図書館に格別のご高配を賜りました。記して深謝申し上げます。



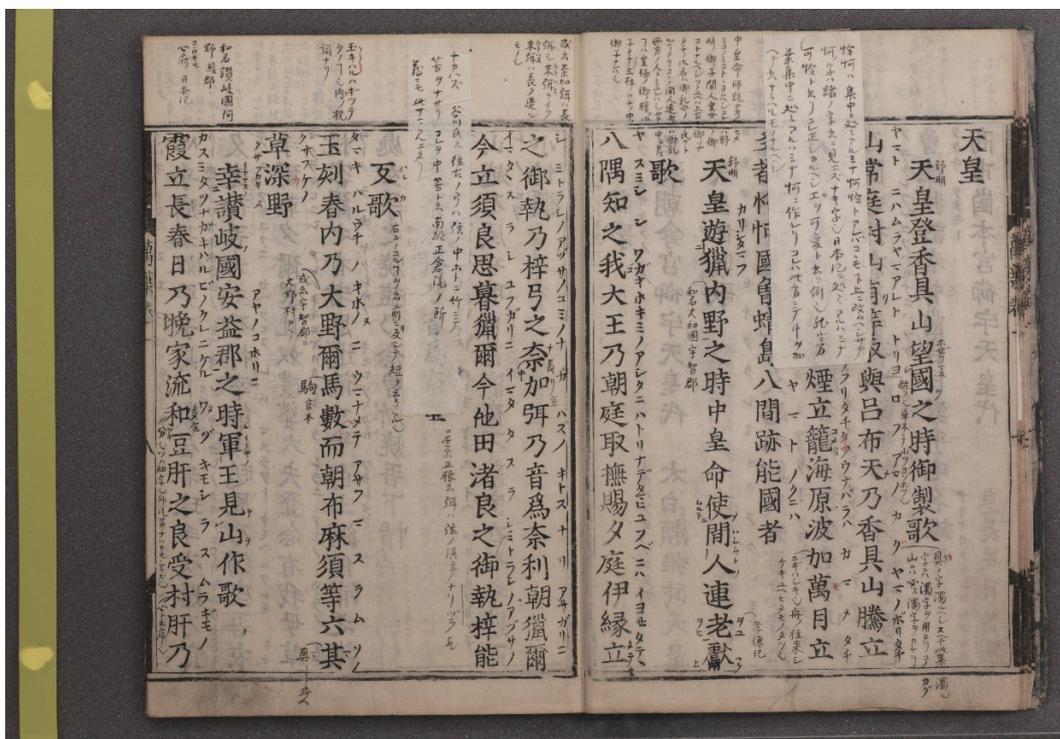
(画像1) 万葉文化館蔵 萬葉集卷第一 6ウ・7才
書き入れ内容は手沢本と重なるが、形式は異なっている。



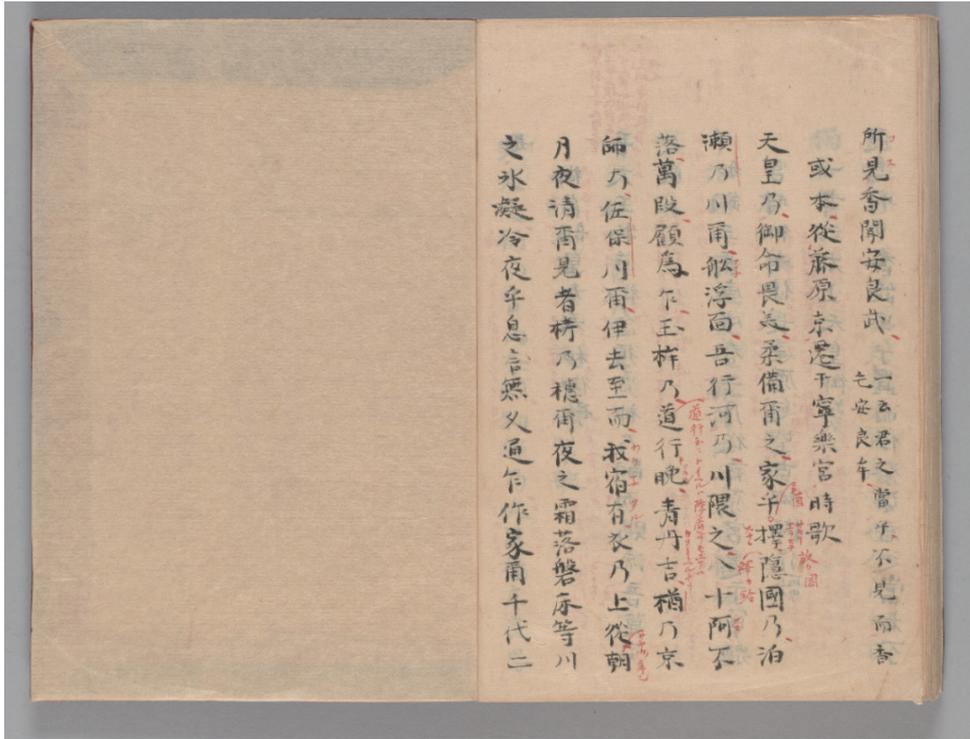
(画像2) 本居宣長記念館蔵 宣長手沢本万葉集 6ウ・7才



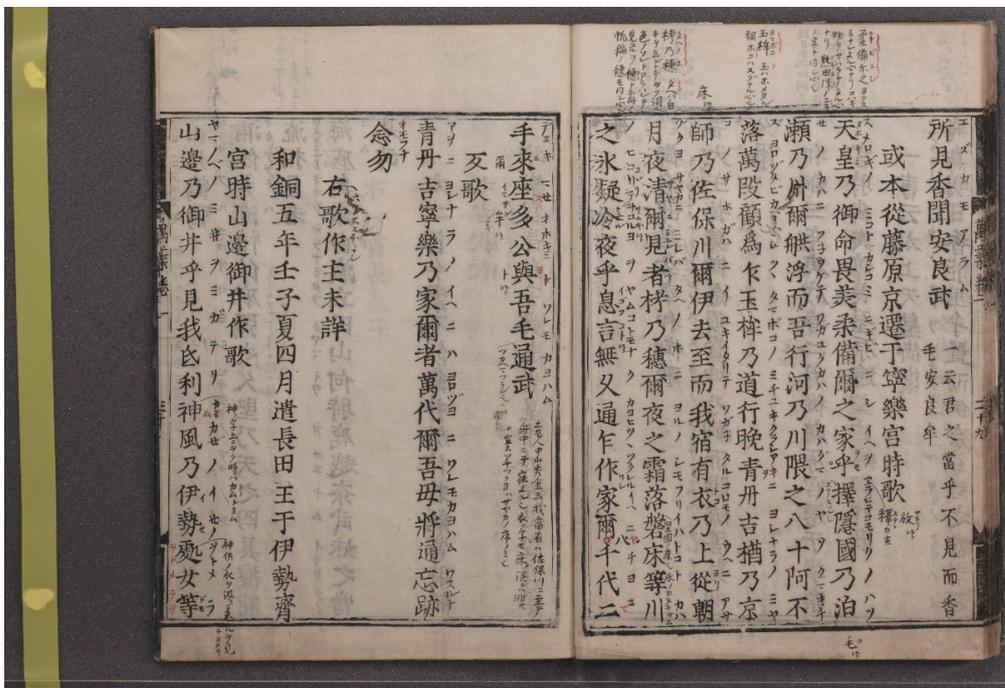
(画像3) 万葉文化館蔵 萬葉集卷第一 7ウ・8才
手沢本にある清濁や枕詞の説明は省き、「中皇命」の説明は増やしている。



(画像4) 本居宣長記念館蔵 宣長手沢本 7ウ・8才



(画像5) 万葉文化館蔵 萬葉集卷第一 29ウ)
手沢本の頭注を書き入れている。後ろの丁が欠落。



(画像6) 本居宣長記念館蔵 宣長手沢本 29ウ・30才)

